

日本の女性たちの手で、「憲法の理想」を世界に広めよう

ふじわら とも こ
藤原 智子

戦後50年に当たる10年前、私は自分の戦争体験として『杉の子たちの50年 ― 学童疎開から明日へのメッセージ』という長編ドキュメンタリー映画を作りました。小学校6年生の時の学童疎開体験から、子どもたちを二度とあのような過酷な目に遭わせたくないという思いからでしたが、正直言って当時は、「まさか（戦争はあるまい）」という楽観的な気持ちもありました。

それ以後、日本の近・現代史の光と影を問い続けてきましたが、10年目になる戦後60年の今年、図らずもこの一連の仕事としては5本目となる作品『ベアテの贈りもの』を発表することになりました。日本国憲法に「男女平等」の条文を加えたベアテさんのお名前は、すでに多くの人の知るところですが、この映画はベアテさんがどのような経緯でそれにかかわったか、そして戦後日本の女性たちはどのようにして、それを実現させていったかという、いわば映像による戦後女性史の一断面です。

この映画の講演の中でベアテさんは、「なぜだかわかりませんが、歴史的にみて女性の方が平和的だと思います。多分女性は子どもを産むからではないでしょうか」と言っています。女性は「生命」を最も身近に感じるからではないか、と私も思います。しかし、『杉の子たちの50年』から10年たった今、「まさか」と思っていた戦争が、にわかに現実味を帯びてきたように感じるのは私だけでしょうか。それは、杞憂に過ぎないでしょうか。講演の締めくくりでベアテさんは訴えています。「日本の女性はずばらしいです。歴史の叡智がつくったと言われるこの憲法の理想を、日本の女性たちの手で世界に広めてください」と。

■プロフィール 東京都生まれ。大学卒業後記録映画会社に入社。以後短編・記録映画の脚本・演出に携わり、100本以上の作品を作る。特に1995年以降は、日本の近・現代史を問う長編ドキュメンタリー『杉の子たちの50年』『ルイズ その旅立ち』『伝説の舞姫 崔承喜』『夢は時を越えて―津田梅子が紡いだ絆』など次々と発表。これらの作品でキネマ旬報文化映画部門ベストテン第一位をはじめ、数々の賞を受賞。